

あとがき

序で触れたことを繰り返すようで恐縮であるが、サルトルの活動領域は哲学、思想、小説、戯曲、映画、政治的パンフレットなど多岐に渡っている。嘗て十七世紀フランスには数学者、物理学者として名を馳せ、それまでのスコラ哲学を打破して独自の体系を打ち立て、近代哲学の祖と謳われたデカルトがいた。彼の知的活動の範囲は数学、物理学にとどまらず占星術、錬金術、魔術にまで及び、果てはスウェーデン女王のためにバレーの台本や詩を書いたりもした。こうしたマルチ才能タイプの知識人は「普遍人」と呼ばれた。十八世紀においてもヴォルテール、ルソー、モンテスキューらが、同様に様々な多岐にわたる分野を幅広く涉猟する仕事を残し、普遍人の伝統を継承した。

ところで、デカルトは『方法序説』をフランス語で書き著した。この新機軸の行為によって、それまでラテン語によってしか議論されなかった「哲学」が文学と社会のなかに入り込んできたといわれる。いわば、哲学が一步一般人の精神世界に近づいたのである。サルトルは専門領域の哲学から出発し、文学（小説）の領域で「名士」としての花を開花させた。端的に言って彼の小説作品『嘔吐』がなければ、われわれは『存在と無』に代表される彼の哲学に興味を懐くことはなかったであろう。その意味でサルトルは現代における「文学」と「哲学」のはざまを遮断する壁を少なからず低くするに功あった人物である。

こうした「普遍人」の仕事を語るとき、われわれはその全領域に通底する一つの精神の核のようなものがある

はずだと想定して、それを探り当てたいと願うのである。そして分野を超える通性に辿り着きたいというこの欲求は無視しがたいものである。これが、本書の『サルトルの文学』というタイトルにもかかわらず、小説・戯曲以外の哲学・思想の領域にも些か踏み込まざるを得なかった一つの理由であるが、願わくば内容が看板を偽る羊頭狗肉の態を成していないことを祈るのみである。

執筆にあたっては、己の非力を承知の上で臨んだこととはいえ、質・量ともに圧倒的なサルトルの業績を前にするとき、自ずから、蔑の髓から天井を覗くことしかできないという、諦念にも似た気持ちを、慨嘆の念とともにそのつど味わいながらの作業であったことを、反省と自戒の意を込めて正直に吐露しておきたい。

思い起こせば学部生の頃からサルトルを読んでいるのであるが、その読み方は、サルトルがときにすっかり忘却の彼方に去ってしまうほどに極めて断続的なものであった。私は生来勤勉な性質を持ち合わせていないので、一つのことを継続的に追究する忍耐力に欠けているのである。そういうわけで、大学院に入ることを勧められてくださった指導教授の故三木治先生に、研究対象としての作家の変更を申し出たことがあった。恐らくは、私の浮気心を見抜いておられた先生は、私が新たに組みむつもりの作家の名前を聞くと、そんなものは君、研究に値しないよと一笑に付されて終わった。それで私の浮気心も治まり、そのまま何となくサルトルとの付き合いが続いている。三木先生から武勳詩『ロランの歌』と、パスカルの『田舎人への手紙』の手ほどきを懇切丁寧にご指導戴いたことは忘れられない思い出である。正直に言って当時は、サルトルと何の関係もない古色蒼然たる作品を読むことに、多少の抵抗感がなかったわけではない。が、いま省みて、武勳詩はともかくとして、パスカルとジャンセニスムに関する基礎的知識を植え付けて戴いたことは、思想研究上少なからず有益であったと思

うのである。その意味で、ご指導賜った故三木治先生に心からの感謝をこめてつたない本書を捧げたいと思う。

最後に、本書を上梓するにあたっては関西大学出版部出版課の皆様には様々な形でお世話を戴いた。懇切丁寧なる御指導と御忠告を賜わり、当方のわがままを心よく聞き容れて戴いた。また、大学院生の竹田悠君には本書のパラテキストの作成に協力を仰ぎ、同じく大学院生の渋谷直樹君にはパリから写真の提供を戴いた。あわせて皆様に感謝の意を表する次第である。

二〇〇六年三月十一日

川神 傅弘

註

序論

- (1) Jean-Jacques Brochier, *Pour Sartre*, Paris, J. C. Lattes, 1995, p. 137.
- (2) *ibid.*, p. 11.
- (3) *ibid.*, p. 135.
- (4) *ibid.*, p. 135.
- (5) Françoise Sagan, *Avec mon meilleur souvenir*, Paris, Gallimard, 1984, pp. 183-185.
- (6) John Gerassi, *Conscience haie de son siècle*, Edition du Rocher, 1992, p. 59.
- (7) *ibid.*, p. 53. なお、サルトルの経歴及び様々な事跡については、主に本書を参考にした。
- (8) *ibid.*, pp. 55-56.
- (9) *ibid.*, p. 57.
- (10) Alain Buisine, *L'ateurs de Sartre*, Presses Universitaires de Lille, 1986.
- (11) アンドレ・グリユックスマン、「歴史への責任」、『海』、中央公論社、一九八〇、p. 339.
- (12) Albert Camus, *L'Homme Révolté*, Gallimard, 119^e édition, 1954, pp. 67-75.
- (13) *Les Mots*, Gallimard, 1964, p. 211.
- (14) Sartre, *Carnets de la drôle de guerre*, Gallimard, 1995.
- (15) J.-P. Sartre, *Œuvres romanesques*, nrf, Pléiade, 1981, p. xxx.
- (16) アンナ・ボスケッティ、「知識人の覇権」、『新評論』石崎晴巳訳、一九八七、p. 71.
- (17) Pierre de Boïdefre, *Le roman français, depuis 1900, Que sais-je? 1979*, p. 48.

- (18) Sartre, *L'Être et Le Néant*, Gallimard, 1968, p. 434.
- (19) Quintus Septimius Florens Tertullianus, A. D. 160-200, カルタゴの生まれ。
- (20) Albert Camus, *L'Homme Révolté*, Gallimard, 119^e édition, p. 13.
- (21) *L'Être et Le Néant*, p. 66.
- (22) Merleau Ponty, *Humanisme et Terreur*, Gallimard, 1947, le Yogi et le Proletaireの章参照。
- (23) 彼の講義は後に *Introduction à la lecture de Hegel* としてレーモン・クノーによってまとめられ、出版された。
- (24) Eric Werner, *de la violence au totalitarisme*, Calmann-Lévy, 1972, p. 21.
- (25) Raymon Aron, *L'opium des intellectuels*, Calmann-Lévy, 1983, p. 53. なお、初版は一九五五年。
- (26) Camus, *Ni victimes ni bourreaux*, o. c., t. II, p. 336.
- (27) *de la violence au totalitarisme*, p. 52.

第一部 不易なるもの サルトルのこだわり

第一章 『嘔吐』 テーマの外側にあるもの —— L'esprit de sérieux 「くそ真面目の精神」の拒否——

- (1) *L'Être et Le Néant*, J.-P. Sartre, Gallimard, Première Partie 及び Deuxième Partie より。
- (2) *ibid.*, Première Partie 及び Deuxième Partie より。
- (3) *ibid.*, p. 227 周辺。
- (4) *L'ARC 30*, De Roquentin à Mathieu, Annie Leclerc, p. 71.
- (5) *Les Mouches* の主人公。
- (6) 『新訳聖書』、マルコによる福音、十四章一〜九。
- (7) *ibid.*, ルカによる福音、十章三十八〜四十二。
- (8) *Les Mouches*, J.-P. Sartre, *Le Livre de Poche*, p. 137 — サルトルはこの戯曲以降「神」を人間に対する根本的障害として、彼方に押しやっている。そこにあつて、彼は、キリスト教のみならず、世界に一つの秩序が存在するという想定 religion naturelle の如きものをも一切含めた、あらゆる秩序の破壊をも企てたことになる。従つてオレストの転向はアリ ストラティックな《世俗嫌忌》からソフィスト的《実践道徳》への移行とも受け取ることが出来る。
- (9) *L'Être et Le Néant*, p. 77.
- (10) *ibid.*, p. 669.
- (11) *ibid.*, p. 669.
- (12) *ibid.*, p. 721. 以上(9) (10) (11) (12) は、いずれも『人文書院』松浪信三郎訳による。
- (13) J.-P. Sartre, *La Transcendance De L'Ego*, VRIN, VIII, L'Existence d'autrui, p. 127.
- (14) Pierre De Boisdeffre, *Métamorphose de la Littérature, II°, de Proust à Sartre*, Édition Alsatia, J.-P. Sartre ou L'Impuissante Liberté, p. 261.

——『肉欲的幻覚』糞便論による偏執的固定観念の表現群を、ボワデッフルは《L'herbier métaphorique (隠喩的植物誌)》

と称してゐる。

- (15) *L'Être et Le Néant*, p. 251. — Ceux qui se cachent leur total liberté, Sartre les appelle des lâches. — Ceux qui croient que leur existence est nécessaires, Sartre les appelle des Salauds...
- (16) *La Nausée*, J.-P. Sartre, Le Livre de Poche, 1968, p. 110.
- (17) *ibid.*, p. 148.
- (18) *L'Être et Le Néant*, p. 77.
- (19) *Huis-Clos*, Le Livre de Poche, J.-P. Sartre, p. 75.
- (20) *La Nausée*, p. 147.
- (21) *ibid.*, p. 167.
- (22) *ibid.*, p. 169.
- (23) *ibid.*, p. 173.
- (24) *ibid.*, p. 140.
- (25) *ibid.*, p. 141.
- (26) *ibid.*, p. 51.
- (27) *ibid.*, p. 19. — “Au fond j'étais jusqu'ici un amateur.”
- (28) *ibid.*, p. 91.
- (29) *ibid.*, p. 207.
- (30) *ibid.*, p. 204.
- (31) *L'Être et Le Néant*, p. 585.

サルトルは《過去》の持つ意味を全くないがしろにしているわけではない。過去はもはや存在しないが、過去の存在に関する記憶は仮定、予測、予想を暗に含んでおり、こうした存在論的予測が、脳の痕跡の有名な仮説を招来したのであ

るが、たとえ、無の中へ過去が瓦解したとしても記憶（脳の痕跡）が実在するのであるから、それが、現在の観念や現在の肉体の中で活動中であるかぎり、事実上の存在は持たぬとしても、それらは総合的に、現在を形成する、*facticié*の一要素であるわけなのだ。この件に関しては、『存在と無』第二章の、*La Temporalité*の項に詳しく述べられている。

- (32) Pierre Boulang, *Sartre est-il un Possédé?*, La Table ronde, 1950. より。
- (33) Simone de Beauvoir, *Pour une morale de l'ambiguïté*, Gallimard, III. 1. *L'Attitude esthétique*. より。
- (34) R.-M. アルベール、『二十世紀文学の決算』、村松剛訳、現代文芸評論叢書、pp. 63-64.
- (35) *Pour une morale de l'ambiguïté*, III. 5. *L'Ambiguïté*.
- (36) *L'Être et Le Néant*, p. 720.
- (37) モーリス・ナドール、『戦後のフランス小説』、みすず書房、篠田浩一郎訳、p. 78.
- (38) ロラン・バルト、『零度の文章』、渡辺淳他訳、みすず書房、一九七〇、p. 174.

第二章 *Carnets de la drôle de guerre* 奇妙な戦争のメモ —— 本来性へのこだわり ——

『奇妙な戦争』の底本としては下記のものを使用した。引用文については、以下ページのみを記す。

J.-P. Sartre, *Carnets de la drôle de guerre*, nrf, Gallimard, 1995.

- (1) *cette paix-guerre, la guerre-paix*, p. 303.
- (2) *authenticité*: 本来性
authentique, l'authentique, / *Eigentlich-keit*
inauthentique, l'inauthentique, inauthenticité
- (3) p. 19.
- (4) p. 188.
- (5) p. 189.

- (9) p. 194.
- (7) p. 195.
- (8) p. 195.
- (6) p. 196.
- (10) p. 403.
- (11) p. 403.
- (12) p. 214.
- (13) p. 214.
- (14) p. 241.
- (15) p. 241.
- (16) p. 241.
- (17) p. 241.
- (18) p. 242.
- (19) p. 244.
- (20) p. 575.
- (21) *Journal de Gide, le 20 décembre 1924, n^o, œuvres complètes XIII, p. 484.*
- (22) *Carnets, p. 575.*
- (23) p. 577.
- (24) p. 578.
- (25) p. 579.
- (26) p. 579.

- (27) p. 579.
- (28) p. 578.
- (29) p. 580.
- (30) pp. 610-612.
- (31) J.-P. Sartre, *Situations, I*, Gallimard, 1978, p. 283.
- (32) *ibid.*, p. 278.
- (33) *Carnets*, p. 253.
- (34) pp. 254-255.
- (35) Stuart Zane Chammé, *Marginality and Authenticity, dimensions of otherness in the world of Jean-Paul Sartre*, The University of Massachusetts Press. AMHERST, p. 6.
- (36) *ibid.*, p. 7.

第二部 自由の希求

第一章 自由への《Les chemins》

- (1) Germaine Brée: *An age of fiction*, 邦訳『小説の時代』（紀伊國屋書店）において、ブレ女史は「サルトルの新技法は理論的には正当であっても、彼の根本的な小説技法に矛盾しており……小説が意図した効果をだいたにする退屈な過程となっている……」と非難している。また、ジョン・ジュラッシによればアメリカ現代文学の研究者ジェルメーヌ・ブレはイギリスのジョージ・シユタインナー、アメリカのアーサー・ダント、ロバート・カミングらと共にサルトル追及の急先鋒であった。なかでも彼女は『反抗的人間』以降のカミュに心酔し、サルトルの最も強力な刺客となった、と語っている。
- (2) 『贗金（へんごり）』
- (3) Jean-Paul Sartre, *Les chemins de la liberté*, T. II *Le sursis*, p. 149.
- (4) Il avait seize ans …… Il s'était dit: 《Je serai libre》, *Les chemins de la liberté*, T. I. *L'âge de raison*, p. 55.
- (5) *ibid.*, p. 71.
- (6) *ibid.*, p. 133.
- (7) *ibid.*, p. 74.
- (8) *ibid.*, p. 127.
- (9) *ibid.*, p. 129.
- (10) *ibid.*, p. 130.
- (11) *ibid.*, p. 133.
- (12) *ibid.*, p. 129.
- (13) R.-M. ALBÉRÉS: *Jean-Paul Sartre*, EDITIONS UNIVERSITAIRES, p. 102.
- (14) Dans la liberté l'être humain est son propre passé (comme aussi son avenir propre) sous forme de néantisation. Jean-Paul Sartre: *L'Être et le Néant*, p. 65.

- (15) Jean-Paul Sartre, *Les chemins de la liberté*, T. III *La Mort dans l'âme*, p. 219.
- (16) なお『*Œuvres*』《*salauds*》《*mauvaise foi*》等に就いては次の二著に見解を求められる。
 PIERRE DE BOISDEFRE: *MÉTAMORPHOSE DE LA LITTÉRATURE* ☆☆ DE PROUST A SARTRÉ, ÉDITIONS ALSATIA, pp. 250-257.
- ANDRÉ MAUROIS: *DE GIDE A SARTRÉ*. LIBRAIRIE ACADEMIQUE PERRIN, p. 290.
- (17) INGRID JOUBERT, *ALÉNATION ET LIBERTÉ DANS LES CHEMINS DE LA LIBERTÉ DE J.-P. SARTRÉ*, Didier, p. 161.
- 第二章 ゲッツ 《変貌》に見る 一十六、十八、二十世紀を生きた一精神史一
- (1) 『サルトル全集十五卷』、あとがき、生島遼一、人文書院より。
- (2) 例えば、「農村の住民のうちでは、ただ貴族だけが外部の社会と関係をもち、新しいいろいろな欲望をもっていたに過ぎず、農民大衆は決して、最も近い地方的諸関係をさえ越えることがなく、またこの地方的関係と結びついている地方的な視野から、頭を出すということもなかった」とエンゲルスはその著『ドイツ農民戦争』(秦玄龍訳、文化評論社)で語っている。農村の住民の生き方はドイツに限らず、ほぼ全欧に於いても類似したものであったろう。
- (3) フリードリッヒ・エンゲルス、『ドイツ農民戦争』、秦玄龍訳、文化評論社、一九四八。
- (4) ローランド・H・ベイントン、『宗教改革史』、出村彰訳、新教出版社、一九六六。
- (5) John Wycliffe, 1320-1384, オックスフォード大学で学びレスターシャーのラタワースの牧師となる。化体説 (transubstantiation theory) を否定し宗教改革者としての立場を明らかにした。神の恩寵、予定、個人の信仰によってのみ救済が得られることを説き教皇への服従を拒んだ。ウイクリフの説はのちのフス戦争、ルターの宗教改革にまで影響を与えるのである。
- (6) Johannes Huss, 1369-1415, ボヘミアの宗教改革者。十五世紀初めにオックスフォード大学のウイクリフの宗教改革説

が伝わり、プラハ大学総長であったフスはただちにこれを信奉、一四一五年の処刑の日まで教皇側からの厳しい弾圧に耐えながら精力的な教会批判活動を続けた。

(7) ウィッテンベルク城内の礼拝堂の扉に九十五の提題を掲げたエピソードについては、十月三十一日ではなく翌日の十一月一日の諸聖人祝日であったという説もあり、また、このような事実は本当は無かったのではないかという提題揭示の信憑性を疑わしく思う意見もあり、真相は定かでないらしい。／渡辺茂、『ドイツ宗教改革史』、聖文舎。

(8) G. R. Elton, *Reformation Europe 1517-1559, 1963* (The Fontana History of Europe)、越智武臣訳、みすず書房 第一章。

(9) *ibid.*, p. 5.

(10) Manfred Bensing, Leipzig, 『トーマス・ミュンツァー』、田中真造訳、未来社、一九六五。

(11) 半田元夫、『宗教改革小史』、清水弘文堂書房、一九六八、第二章。

(12) ルターの農民戦争に対する態度は、古来、激しい論議の対象になってきている。それをルターの生涯における「ぬぐうべからざる汚点」と酷評するものから、彼の「偉大さの頂点」として称賛するものにといたるまで、その評価は極端に対立している。／渡辺茂、『ドイツ宗教改革史』、聖文舎、一九七八、p. 71.

(13) 瀬原義生、岩波講座、世界歴史十四、近代一、『ドイツ農民戦争』、p. 341.

(14) 「一四八〇年 Württemberg の Jaxhausen に生まれた Götz は十五歳の時に伯父に伴われて Worms の Reichstag を見、幼少にして已に独逸国内の擾乱の縮図に接した。間もなく諸方の王侯に与して、戦争を事とするが、自分はいつまでも独立の騎士として、一身の自由を保証しえた。彼は或る戦役の際右手を失い、精巧なる鉄腕を以て之に代えた。戦場に於ける多くの経験は彼の名を独逸に於ける最も勇敢なる騎士にした。一五二五年彼は百姓一揆の頭目に祭り上げられたが、その騷擾の終わる頃遂に捕われる。彼は Augsburg に於いて、百姓の頭目となった理由を弁明して、より大なる不祥事をそれによって防圧し得たことを証明したために、一五三〇年遂に釈放される。併し而後は Hornberg の彼の居城に籠居すること、及び Mainz と Würzburg に賠償する事の内容で許される。後カール皇帝のために土耳其征戦に加わり、更に対仏蘭西

- の戦役にも従軍している。平和条約締結後は再びホルンベルクに帰って一五六二年八十二歳の高齡を以てその生涯を終える。／以上、簡略なゲッツの略歴。『若きゲーテ』研究』、木村謹治著、弘文堂書房、一九三八、p. 524.
- (15) Riterkrieg (騎士戦争) 一五二二―一五二三年、帝国騎士フランツ・フォン・ジッキンゲンが思想的代弁者たるウルリヒ・フォン・フッテンと呼応して起こした戦争。農民の地位の上昇やブルジョワ階級の目覚ましい台頭と大諸侯の間で没落過程にあつた騎士階級の地位の再上昇を目論んだ、政治的には全く反動的な運動であつた。皇帝中心・騎士中核の中間的統治形態の復歸を望んだが、銃砲火器の發達は既に彼らの出番を失わしめていた。
- (16) Richard Friedenthal, *Goethe, Sein Leben und Seine Zeit*, 平野雅史他訳、講談社、上巻、一九六三、p. 132.
- (17) *ibid.*, p. 133.
- (18) Jean-Paul Sartre, *LE DIABLE ET LE BON DIEU*, GALLIMARD, Le LIVRE de POCHE, 1966, p. 228.
- (19) *Le Diable et le Bon Dieu* a une histoire: l'existence de Jean Genet fournit à Sartre le sujet d'une pièce que la découverte des Propos de Table de Luther lui fit situer au temps de la Réforme et non plus en Afrique, comme il l'avait pensé tout d'abord (le titre initial était: *La vengeance d'un Nègre*). / J.-P. SARTRE ou L'IMPUISSANTE LIBERTÉ, MÉTAMORPHOSE DE LA LITTÉRATURE II, PIERRE DE BOISDEFRE, ÉDITIONS ALSATIA, p. 287.
- (20) Robert Lortis, *SARTRE DRAMATURGE*, A. G. NIZET, p. 186. 46°.
- (21) フリードリッヒ・エンゲルス、『ドイツ農民戦争』。
- (22) 木村謹治、『若きゲーテ』研究』(改訂版)、弘文堂書房、p. 507.
- (23) Robert LORRIS, *SARTRE DRAMATURGE*, A.-G. NIZET, 1975, p. 218.
- (24) *ibid.*, p. 219.
- (25) Sartre, *Les Mouches*, Gallimard, Paris, 1943.
- (26) Philippe Hodard, *Sartre entre Marx et Freud*, Editions Universitaires, Jean-Pierre Delarge, 1979, p. 129.
- (27) *ibid.*, p. 34.

- (28) *ibid.*, p. 35.
- (29) Peter Szondi, 『現代戯曲の理論』、市村仁也訳、ウニベルシタス叢書、一九六三、pp. 123-126.
- (30) Sartre, *Le Diable et Le Bon Dieu*, Gallimard, 1951; p. 100.
- (31) *ibid.*, p. 101.
- (32) *ibid.*, pp. 102-103.
- (33) 舟木重信『ゲーテ人生読本』、第四卷、六芸社、一九三六、p. 108.
- (34) Jean-Paul Sartre, *Critique de la raison dialectique — Questions de méthode*, 平井啓之訳、人文書院、pp. 16-17.
- (35) Jean-Paul Sartre, *L'Être et le Néant*, Gallimard, pp. 720-722.
- (36) *OBLIQUES, Numéro Special, SARTRE INÉDIT*, dirigé par Michel SICARD, La Grande Morale extraits d'un Cahier de notes 1947., pp. 249-262.
- (37) *ibid.*, p. 250.
- (38) サルトル『方法の問題』、pp. 26-28.
- (39) *ibid.*, p. 38.
- (40) *Le Diable et Le Bon Dieu*, pp. 80-81.
- (41) *ibid.*, p. 77.
- (42) *ibid.*, pp. 102-103.
- (43) *L'Être et le Néant*, p. 798.
- (44) Manfred Bensing, 『ユーネス・マハンツナー』、Leipzig, 田中真造訳、未来社、一九六五、p. 90.
- (45) Richard Friedenthal, *Goethe, Sein Leben und Seine Zeit*, 平野雅史他訳、講談社、上巻、一九六三、p. 132.
- (46) *ibid.*, p. 166.
- (47) Hermann August Korff, *Geist der Goethezeit*; Versuch einer ideellen Entwicklung der Klassischromantischen Literaturgeschichte,

- 『ゲーテ時代の時代精神』第一巻、松永讓一訳、桜井書店、p. 98.
- (48) ゲーテ全集、第十巻、小牧健夫他編集、人文書院、一九六〇、p. 73.
- (49) 木村謹治、『若きゲーテ』研究』（改訂版）、弘文堂、p. 506.
- (50) *Le Diable et Le Bon Dieu*, pp. 228-229.
- (51) Pierre-Henri Simon, *THEATRE DESTIN; ARMAND COLIN*, p. 182. 465°.
- (52) 『ゲッツ・フォン・ベルリッピンゲン』、ゲーテ全集第十一巻、改造社版、一九三六、pp. 442-443.
- (53) *ibid*, pp. 532-533.
- (54) Richard Friedenthal, *Goethe, Sein Leben und Seine Zeit*, pp. 167-176.
- (55) ゲーテ全集、第十巻、人文書院、小牧健夫他編集、pp. 40-42.

第三部 レトリック ――スカトロロジーとパラテクスト――

第一章 サルトルにおける『糞便論的記述』

- (1) Walter Benjamin: 著作集七『文学の危機』 Werkle Band 7. All rights reserved by Suhrkamp Verlag KG., Frankfurt 高木久雄、佐藤康彦訳、一九六九、p.166.
- (2) モーリス・ブランショ、『焰の文学』、現代文芸評論叢書、紀伊國屋書店、重信常喜訳 p.131。テーマはそれが形成される論理的な場所では生き生きとしているが現実的な事物の反映のなかに移植されると死んだ思考となる。この種の小説では人物に生命がないといつて非難されるが、生命がないのは観念である。つまり観念はもはや自分自身にしか似ず、自分自身の意味しか持っていない。作為の世界は観念をちつともかくそうとしない。そこでは観念がその起源における裸の状態よりもよく見え、また非常によく見えるから、われわれに提供すべき秘密を少しも持っていない。
- (3) Pierre Guiraud, *La Stylistique*, (Collection. Que sais-je? N° 646) 佐藤信夫訳、p.117.
- (4) *Situations*, I Maurice Blanchot を評した『アミナダブ』の章を参照。
- (5) モーリス・ブランショ、『焰の文学』、一九五九、ibid., p.136.
- (6) Claude-Edmond Magny, *Essai sur les Limites de la Littérature*, Petite Bibliothèque Payot: Les sandales d'Empédocle, p.157
で次のように述べている。
しかしわれわれは次のように問う権利がある。『嘔吐』の文学的手法、つまり組み立てやエピソードの《切り取り》などは例えば、読者になんらかの印象をもたらすことや、本を読んでいる間ロカントンの体験にわれわれを縛り付けることのみが問題となる限りは完全に正当なものである。が、それらが同時に別の工夫なしに、われわれを存在に導く現象学的体験として『嘔吐』の正当化を保証しうるかどうかは疑わしい。
- (7) ibid., p.160.
- (8) *L'Imaginaire, Qu'est-ce que la littérature? Bandulaire* 等の作品はすべてその命題から出発している。詩を書く人間は結局非實在の世界、真実でない世界を創造するが故に、彼らは無益なものしか与えない。詩は *l'réel* という意味で既に《悪》

そのまゝである。

- (9) Guido Morpurgo-Tagliabue, *SARTRE, A collection of critical essays*. Edited by Edith Kern. Prentice-Hall, Inc., England Cliffs, N. J. p. 120.
 - (10) *Qu'est-ce que la littérature?* Gallimard, 'Qu'est-ce qu'écrire?' p. 33.
 - (11) *ibid.*, p. 17.
 - (12) 但し、そこに抒情性を見出すことが私自身の独断的なことの証言を示しておこう。 *Metamorphose de la littérature*, II. De Proust à Sartre. Edition Alsatia. Pierre de Boisdeffre. p. 259. 46。
- サルトルの描写にも叙情性はある。が、それは暗いじめじめした詩情であり、カフカやジュリアンドー、あるいはジャン・ジユネの詩から生まれる詩情に類似している。
- (13) *La Nausée*, Le livre de poche. pp. 222-223.
 - (14) Pierre de Boisdeffre, *Metamorphose de la littérature*, II, *ibid.*, p. 258.
 - (15) *ibid.*, pp. 258-261.
 - (16) *L'Être et le Néant*, Gallimard, p. 29.
 - (17) *La Nausée*, Le livre de poche. p. 180.
 - (18) *ibid.*, p. 182.
 - (19) J.-P. Sartre, *L'Imaginaire*, Gallimard, p. 162.
 - (20) J.-P. Sartre, *Le Mur*. Collection folio, Gallimard. *Érosstate*. pp. 85-87.
 - (21) *ibid.*, *L'enfance d'un chef*, pp. 174-175.
 - (22) *L'enfance d'un chef* の肛門性欲症の描写はフロイトに起因しているように思える。なお、フロイトに関するサルトルの見解は *L'Être et le Néant* の *La Psychanalyse existentielle* に詳しい。
 - (23) 主として斜視「父の居ない」で、再婚によって母を奪われたこと等、 *Les mots* に詳しい。

- (24) *Le Diable et Le Bon Dieu*, Le livre de poche, p. 81.
- (25) *ibid.*, p. 216.
- (26) Georges Poulet, *Les critiques de notre temps et SARTRE*, [*Le Cogito sartrien*], Édition Garnier, p. 41.
- (27) *L'Imaginaire* の最終部分において、サルトルは、芸術作品はすべて analogon の所産であるが故に非実体的なものであり、審美的観想は空無化作用 (néantisation) を呼び起すに止まるとする。
- (28) *L'Imaginaire* 以外にも、*L'Être et le Néant* でも関連した記事はある。p. 661.
- 存在が一つの全体性であるとするならば、果たして次のような事実は受け入れ難いものである。いくつかの象徴化の基本的関係、例えば「糞」金、針刺し「乳房等々」の象徴化が成立し、それはいかなる場合にも不易な意味を持つとする時、ある意味的総体から別の意味的総体に移行しても、象徴化の基本関係は変質しない、というのは考えられない。
- (29) Simone de Beauvoir の *La force de l'âge* (女々かり) より。
- (30) Miquel de Unamuno y Jogo, *La agonía del cristianismo*, 『キリスト教の苦悶』、ウニベルシタス叢書、法政大学出版社、神吉敬三、佐々木孝訳 p. 4.
- (31) Robert G. Olson, *An introduction to existentialism*, 成川武夫訳、紀伊國屋書店、p. 77.
- (32) *L'Être et le Néant*, *ibid.*, p. 69.
- (33) *ibid.*, p. 81.
- (34) *ibid.*, p. 82.
- (35) *La force de l'âge*, 朝吹登水子、二宮フサ訳、紀伊國屋書店、p. 11.
- (36) *Métamorphose de la littérature*, *ibid.*, p. 261.
- (37) Beauvoir の回想録『*La force de l'âge*』より。
- (38) Peter Dempsey 博士の証言。モリス・クランストン、『サルトルの世界』堂庭一郎訳、清水弘文堂、一九七一、pp. 7-8.

- (39) *La Nausée*, *ibid.*, pp. 218-219.
- (40) *Le Mur*, Gallimard, folio, 1972, p. 189.
- (41) *ibid.*, p. 171.
- (42) *ibid.*, p. 191.
- (43) *ibid.*, p. 207.
- (44) 註(14)を参照。
- (45) *L'Être et le Néant*, *ibid.*, p. 66.
- (46) *La Nausée* の épigraphe が Céline の文章であることからして、サルトルが Céline によほどの共感を覚えたことは疑いなく。
- (47) Michel Contat, Michel Rybakka, *Les Écrits de Sartre*, Chronologie, bibliographie commentée, Gallimard, p. 25.
- (48) *Le Mur* の舞台になった。
- (49) *L'Être et le Néant*, *ibid.*, p. 705.
- (50) *ibid.*, p. 706.

第二章 サルトル スカトロジエへの郷愁

- (1) Pierre de Boisdeffre, *Le Roman français depuis 1990 (que sais-je ? 1979)* p. 48.
- (2) *ibid.*, p. 47.
- (3) *ibid.*, p. 47.
- (4) Walter Benjamin, 著作集七『文学の危機』 Werke Band 7, All rights reserved by Suhrkamp Verlag KG., Frankfurt 高木久雄他訳 p. 166.
- (5) 白井浩二『純粋観客』大光社、一九七〇、p. 144, より。

- (6) モーリス・ブランシヨ、『焔の文学』、重信常喜訳、紀伊國屋書店、p. 166.
- (7) Pierre de Boisdeffre, *METAMORPHOSE DE LA LITTÉRATURE II: DE PROUST A SARTRE* (ALSATIA 1963) p. 258.
- (8) J.-P. Sartre, *La Nausée*, Le livre de poche, pp. 222-223.
- (9) 『彼は葉緑素アレルギーで、牧草の緑がたまらなかつた。』／Simone de Beauvoir, *La force de l'âge*, 朝吹登水子訳、紀伊國屋書店、p. 11.
- (10) "L'être transphénoménal de ce qui est pour la conscience est lui-même en soi." *L'Être et le Néant*, Gallimard, p. 29.
- (11) *La Nausée*, Le livre de poche, p. 180.
- (12) *Le Mur*, Gallimard, folio, 1972, pp. 107-108.
- (13) *ibid.*, pp. 113-114.
- (14) *ibid.*, pp. 24-25.
- (15) Pierre Boutang, *Sartre est-il un possédé ?*, Table Ronde, 1964.
- 非常に懐疑的な人々が一般にわれわれが思っている以上に《憑かれた人》が増えている事実を認識し始めている。元合衆国副大統領ワレス氏はヒットラーは悪魔か、少なくとも反キリスト者かと問うた。ところで！サルトルを現代の悪魔タイプに仕立てようとする彼ら両者にとつて不利益な評判を打ち消すために、われわれは事実は全く違うことを証明しようとするものである。しかしながら、これら二人の人物には共通点がある。それは憑依的妄想である。要するに、悪魔に《憑依している》のがサルトルである可能性は殆どないのであるから次のように断言するに到る…サルトルは憑かれた人間である。
- (16) 『嘔吐を催させる、粘液質の小説家であり、かつ明晰にして論理的な哲学者。これが同一人物の極めて異なる両面である。』／Charles Moeller, *Littérature du XX^e siècle et christianisme II, La Foi en Jésus-Christ*, CASTELMAN 1976, p. 51.
- (17) *Le Mur*, p. 47.
- (18) *ibid.*, pp. 70-71.

- (35) *L'Être et le Néant*, Librairie Gallimard, 1948, pp. 704-706.
- (36) *ibid.*, p. 705.
- (37) ケーテの Sturm und Drang と卑語の問題に就いては、『ゲッツ《変貌》に見る』を参照されたい。
- (38) 二宮敬、岩波講座文学九、六『ラフレーはどう読まれてきたか』を参照。
- (39) J.-P. Sartre, *L'Être et le Néant*, Librairie Gallimard, 1958, p. 34.
- (40) J.-P. Sartre, 『方法の問題』、平井啓之訳、人文書院、pp. 53-54.
- (41) *OBLIQUES, Numéro Spécial, Sorite Inedit*, dirigé par Michel SICARD, La Grande Morale extraits d'un Cahier de notes (1947), 1979, pp. 249-262.
- (42) Germaine Brée and Margaret Guiron, 『小説の時代』、紀伊國屋書店、佐藤朔訳、p. 6.
- (43) ALFRED STERN, *SARTRE His Philosophy and Psychoanalysis*, The Liberal Arts Press New York, 1953, p. 12. より。
- (44) *ibid.*, p. 223.
- (45) 当拙論に或るヒントを与えてくれた、コリン・ウィルソンの『嘔吐』評の一部。《サルトルの初期の小説『嘔吐』は、人生が不条理で無意味に思える瞬間を終始体験し続けている男をとり扱っている。(……) これはだから、経験の第一次段階、直接的で混乱した未消化の経験段階、と呼ぶようなものだといえる。哲学者ホワイト・ヘッドは好んでこれを「表象的直接性」と呼んだ。(……) 直接性は、それが非常に密着した大写しであるがゆえに無意味な如くに見える、だけなのである。大写しの密着性は必然的に意味を奪ってしまう。世界でもっとも偉大な絵画といえども、仮にカンバスから半インチのところ鼻つきつけてこれを眺めるならば、それは全く無意味な印象を与えることであろう。(……) 作家にとって問題となるのは、『引き戻す』こと、全体像が眺められるに十分なまでにカメラを遠ざけようとすることである。》

Colin Wilson: *The Craft of the Novel* (1975) 鈴木建三訳、紀伊國屋書店、1980, p. 215.

第三章 『嘔吐』における「緒言」の意味 ―問題小説のささやかなる美学―

- (1) Gérard Genette, *Seuils*, éditions du seuil, 1987, p. 7.
- (2) *ibid.*, p. 7.
- (3) *ibid.*, p. 8.
- (4) *ibid.*, p. 8. Philippe Lejeune からの引用。
- (5) *ibid.*, p. 8.
- (6) *La Nausée*, Pléiade, 1981, p. 3.
- (7) *ibid.*, p.3.
- (8) S. de Beauvoir, 『女々かり』上、朝吹登水子他訳、紀伊國屋書店、一九七二、p.98.
- (9) *La Nausée*, p.5.
- (10) *ibid.*, p. 7.
- (11) *ibid.*, p. 8.
- (12) *ibid.*, p. 9.
- (13) *ibid.*, p. 9.
- (14) *ibid.*, p. 10.
- (15) Milan Kundera, 『小説の精神』、金井裕他訳、ユニベルシタス、一九九三、p. 4.
- (16) Jean Rousset, *Forme et Signification*, Librairie José Corti, 1973, une forme littéraire: le roman par lettres.
- (17) *ibid.*, p. 69.
- (18) *ibid.*, p. 69.
- (19) *ibid.*, p. 68.
- (20) *La Nausée*, p. 204.

註

- (21) *ibid.*, p. 204
- (22) *ibid.*, p. 8.
- (23) *ibid.*, p. 24.
- (24) *ibid.*, p. 72.
- (25) *ibid.*, p. 184.
- (26) Pierre de Boideffre, 『小説はどくどく行くか』、望月芳郎訳、講談社、一九六三、p. 113.
- (27) *ibid.*, p. 118.
- (28) *ibid.*, p. 109.
- (29) Geneviève Idr, *Modèles scolaires dans l'écriture sartrienne*, revue des sciences humaines, N°174, 1979, p.103.
- (30) *ibid.*, p. 85. *Méthode française et exercices illustrés.*
- (31) *ibid.*, p. 86.
- (32) *ibid.*, p. 85.
- (33) *ibid.*, p. 85.
- (34) *ibid.*, p. 90.
- (35) *La Nausée*, p. 22.
- (36) Jean Ricardou, 『小説のテキスト』、野村英夫訳、紀伊國屋書店、一九七四、p. 25.
- (37) *La Nausée*, p. 151.
- (38) *ibid.*, p. 151.
- (39) *ibid.*, p. 150.
- (40) *ibid.*, p. 153.
- (41) *ibid.*, p. 155.

- (42) *Modèles scolaires*, p. 85.
- (43) *Forme et Signification*, p.V.
- (44) *ibid.*, p.VII.
- (45) *ibid.*, p.VIII.
- (46) *ibid.*, p.VIII.
- (47) *Modèles scolaires*, p. 96.
- (48) C.-E. Maguy, 『文学の限界』、三輪秀彦訳、竹内書店、一九六八、p. 154.
- (49) Flaubert, *Correspondance II*, Pétade, 1980, p. 31, 16 janvier 1852.
- (50) *ibid.*, p. 417, 26 août 1853.
- (51) *Forme et Signification*, p.IX.
- (52) Sartre, *Qu'est-ce que la Littérature?*
- (53) Gérard Genette, 『フィギュール』、平岡篤頼金訳、未来社、一九九三、p. 72.
- (54) Merleau-Ponty, *Les Aventures de la Dialectique*, Gallimard: Idées, 1955.

第四部 サルトルの他者観 眼差しと被害者意識

第一章 Sartre と眼差し

- (1) Jean-Paul Sartre: *L'Existentialisme est un humanisme*, Paris, Nagel, 1946, p. 95.
- (2) *ibid.*, p. 21.
- (3) Pierre-Henri Simon, *l'Esprit et l'Histoire*, Paris, Payot, 1969, p. 146.
- (4) Jean-Paul Sartre, *le Diable et le Bon Dieu*, Gallimard, Poche, 1951, p. 19.
- (5) Jean-Paul Sartre, *les Mots*, Gallimard, 1964, pp. 84-85.
- (6) *ibid.*, p. 83.
- (7) *ibid.*, p. 83.
- (8) Jean-Paul Sartre, *le Sursis*, Gallimard, Poche, 1945, pp. 157-158.
- (9) *le Diable et le Bon Dieu*, p. 228.
- (10) モーリス・ナドール『戦後のフランス小説』、みすず書房、篠田浩一郎訳、p. 78.
- (11) *le Diable et le Bon Dieu*, p. 228.
- (12) *ibid.*, p. 228.

第二章 『他者』意識の〔実在〕と〔非実在〕

- (1) J.-P. Sartre, *L'Être et le Néant* (以下 E. N. と略す)、Gallimard, p. 275.
- (2) *ibid.*, p. 280.
- (3) *ibid.*, p. 319.
- (4) *ibid.*, p. 319.
- (5) *ibid.*, p. 319.

- (6) *ibid.*, p. 319.
- (7) J.-P. Sartre, *Le Sursis*, Gallimard, poche, p. 157.
- (8) Albert Camus, *Le Mythe de Sisyphe*, Gallimard, idées, p. 26.
- (9) *ibid.*, p. 18.
- (10) *ibid.*, p. 18.
- (11) *ibid.*, p. 18.
- (12) É. N. p. 609.
- (13) *ibid.*, p. 609.
- (14) *ibid.*, p. 609.
- (15) 第五部第一章『フランス現代文学に見る〔不条理〕の実体』を参照されたい。
- (16) Pierre. V. Zima, *L'indifférence romanesque Sartre, Moravia, Camus*, Le sycamore, pp. 78-9.
- (17) *ibid.*, p. 79.
- (18) J.-P. Sartre, *La Nausée*, Gallimard, poche, p. 180.
- (19) Pierre de Boisdeffre, *Le roman français depuis 1900*, que sais-je?, p. 47.
- (20) 多血質、胆汁質、粘液質などと並ぶ、ガレーノスと呼ばれる四つの気質の一つ。固執的、消極的、用心深さ、敏感、無口、憂うつ等をその性質とみる。
- (21) É. N. p. 660.
- (22) J.-P. Sartre, *BAUDELAIRE*, Gallimard, 1963, p. 60.
- (23) *ibid.*, p. 60.
- (24) J.-P. Sartre, *L'Idiot de la famille*, Gallimard, 1971, p. 7.
- (25) *ibid.*, p. 8.

- (26) *L'idiote de la famille*, pp. 8-9.
- (27) *ibid.*, p. 13.
- (28) *ibid.*, p. 17.
- (29) *ibid.*, p. 23.
- (30) *ibid.*, p. 23. サルトルは「生活と言葉が通約不可能である」状態を説明して
589°
- (31) *ibid.*, p. 15.
- (32) *ibid.*, p. 29.
- (33) *ibid.*, pp. 29-30.
- (34) *ibid.*, p. 30.
- (35) *BAUDELAIRE*, p. 19.
- (36) *ibid.*, pp. 19-20.
- (37) *ibid.*, p. 19.
- (38) *ibid.*, p. 19.
- (39) *ibid.*, p. 19.
- (40) *ibid.*, p. 20.
- (41) *ibid.*, p. 21.
- (42) *ibid.*, p. 21.
- (43) *ibid.*, p. 15.
- (44) *ibid.*, p. 105.
- (45) *Les Mots*, p. 24.

- (46) *ibid.*, p. 191.
- (47) *ibid.*, p. 197.
- (48) 海老坂武訳、『サルトルー自身を語る』、人文書院、p. 13.
- (49) *ibid.*, p. 15.
- (50) *BAUDELAIRE.* p. 58.
- (51) *ibid.*, p. 62.
- (52) *ibid.*, p. 26.
- (53) *ibid.*, p. 84.
- (54) *ibid.*, p. 84.
- (55) *ibid.*, p. 83.
- (56) *ibid.*, p. 88.
- (57) *ibid.*, p. 101.
- (58) *ibid.*, p. 79.
- (59) *ibid.*, p. 79.
- (60) *ibid.*, p. 79.
- (61) *ibid.*, p. 79.
- (62) *ibid.*, p. 17.
- (63) Laurent Gagnebin, *connaître Sartre*, naraout université, p. 43.
- (64) Geneviève Idt, *Sartre et la mise en signe*, Klincksieck & C^{ie}, p. 29.
- (65) *Les Mots*, p. 11.

第三章 サルトルと biographie —サルトルにおける伝記的アプローチ—

- (1) *La Nausée, Le livre de poche, 1968, p. 24.*
- (2) *ibid., p. 24.*
- (3) *ibid., p. 24.*
- (4) *ibid., p. 24.*
- (5) *ibid., p. 24.*
- (6) *ibid., p. 24.*
- (7) *ibid., p. 24.*
- (8) *ibid., p. 24.*
- (9) *ibid., p. 24.*
- (10) フロベールが年金生活者ブヴァールとベキュシェの二人を組上にあけて、侮蔑と憤りをこめてブルジョアの下劣さを描いた作品はサルトルのロカタン像の形成に一役買っていると思われる。
- (11) *La Nausée, p. 25.*
- (12) *ibid., p. 28.*
- (13) *ibid., p. 25.*
- (14) *ibid., p. 136.*
- (15) Alexandre Astruc 他『サルトル自身を語る』Edition Gallimard, 1977 人文書院、一九七九、p. 59.
- (16) *ibid., p. 60.*
- (17) *La Nausée, p. 137.*
- (18) 関係性の拒絶については、—サルトル…スカトロジーへの郷愁—を参照されたい。
- (19) *La Nausée, p. 139.*

- (20) *ibid.*, p. 139.
- (21) *ibid.*, p. 136.
- (22) Douglas Collins, *Sartre as Biographer*, Harvard University Press, 1980, p. 9.
- (23) *ibid.*, p. 9.
- (24) *ibid.*, p. 9.
- (25) *ibid.*, p. 9.
- (26) *ibid.*, p. 9.
- (27) *ibid.*, p. 9.
- (28) *ibid.*, p. 9.
- (29) Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Félix Alcan, 1929, avant-propos.
- (30) *ibid.*, avant-propos.
- (31) *Sartre as Biographer*, p. 9.
- (32) J.-P. Sartre, 『方法の問題』、人文書院、平井啓之訳、一九六六、p. 6.
- (33) *ibid.*, p. 22.
- (34) *ibid.*, p. 30.
- (35) Simone de Beauvoir, *La cérémonie des adieux suivi d'Entretien avec Jean-Paul Sartre*, Gallimard, 1947, p. 215.
- (36) 第四部第一章。
- (37) J.-P. Sartre, *L'Être et le Néant*, Gallimard, p. 280.
- (38) *ibid.*, p. 319.
- (39) *ibid.*, p. 319.
- (40) *La cérémonie des adieux*, p. 196.

- (41) *ibid.*, p. 197.
- (42) *ibid.*, p. 197.
- (43) Michel Sicard, *OBLIQUES*, Numéro 18-19, Borderie, p. 179 (*L'engagement de Mallarmé*).
- (44) *ibid.*, p. 184.
- (45) John Gerassi, *Sartre, Conscience haïe de son siècle*, Edition du Rocher, 1992, II Adulte Terrible 小説部註。
- (46) *La cérémonie des adieux*, p. 50.
- (47) *ibid.*, p. 50.
- (48) *OBLIQUES*, p. 179.
- (49) *ibid.*, p. 179.
- (50) *ibid.*, p. 179.
- (51) J.-P. Sartre, *L'Idiot de la famille* ★, Gallimard, 1971, (Lire, Nâveté et Langage)
- (52) *ibid.*, pp. 8-9.
- (53) *ibid.*, p. 17.
- (54) *ibid.*, p. 133.
- (55) *ibid.*, p. 136.
- (56) *ibid.*, p. 151.
- (57) *ibid.*, p. 151.
- (58) *Sartre as Biographer*, p. 7.
- (59) *ibid.*, p. 7.
- (60) *Huis-Clos*, Gallimard, folio, 1972, p. 93.

第四章 サルトルの「愛」と「他者」

- (1) Jean-Jacques Brochier, *Pour Sartre*, Paris, J.C. Lattès, 1995. p. 11.
- (2) *ibid.*, p. 135.
- (3) *ibid.*, p. 136.
- (4) *ibid.*, p. 136.
- (5) *ibid.*, p. 137.
- (6) *ibid.*, p. 137.
- (7) *ibid.*, p. 137.
- (8) Alain Buisine, *L'attente de Sartre*, Presses Universitaires de Lille, 1986.
- (9) *L'Être et le Néant*, nrf, 1886.
- (10) *ibid.*, p. 275.
- (11) *ibid.*, p. 280.
- (12) *ibid.*, p. 319.
- (13) *ibid.*, p. 319.
- (14) *ibid.*, p. 431.
- (15) J.-P. Sartre., *Le Sursis*, Gallimard, poche, p. 157.
- (16) *op.cit.*, p. 609.
- (17) *ibid.*, p. 609.
- (18) *ibid.*, p. 609.
- (19) Pierre V.Zima, *L'indifférence romanesque Sartre, Moravia, Camus, Le sycamore*, pp. 78-79.
- (20) *ibid.*, p. 79.

- (21) J.-P. Sartre, *La Nausée*, Gallimard, poche, p. 180.
- (22) J.-P. Sartre, *L'Imaginaire*, Gallimard, 1940, p. 20.
- (23) Jean Rousset, *Forme et Signification*, José Corti, 1986, Introduction, pp. vi-vii.
- (24) *ibid.*, pp. vii-viii.
- (25) Geneviève Idt, *Sartre romancier : lectures actuelles de l'œuvre romanesque de Sartre*, 平成十二年(二〇〇〇年)十一月二十
八日、関西大学に於ける Geneviève Idt 氏 招聘講演原稿より。
- (26) *ibid.*, p. 4.
- (27) *ibid.*, p. 4.
- (28) *ibid.*, p. 4.
- (29) *ibid.*, p. 3.
- (30) *ibid.*, p. 3.
- (31) *La Nausée*, p. 180.
- (32) Pierre de Boisdefre, *Le roman français depuis 1900, que sais-je? p. 47.*
- (33) Suzanne Lilar, *A propos de Sartre et de l'amour*, Bernard Grasset, 榊原晃三訳、サイマル出版会、一九六七、p. 56.
- (34) *ibid.*, p. 61.
- (35) J.-P. Sartre, *Les Mots*, Gallimard, p. 15.
- (36) 『サルトル―自身を語る』海老坂武訳、人文書院、p. 13.
- (37) *ibid.*, p. 15.
- (38) J.-P. Sartre, *Baudelaire*, Gallimard, p. 21.
- (39) *ibid.*, p. 21.
- (40) *ibid.*, p. 15.

- (41) *ibid.*, p. 105.
- (42) *op. cit.*, p. 434.
- (43) *L'Être et le Néant*, p. 413.
- (44) *L'Être et le Néant*, p. 313.
- (45) *ibid.*, p. 108.
- (46) *ibid.*, p. 108.
- (47) Sartre, *un théâtre de situations*, idée / gallimard, 1973, p. 238.
- (48) Simone de Beauvoir, *Le deuxième sexe*, 生島遼一訳、新潮文庫、一九八七、p. 50.
- (49) *ibid.*, p. 50.
- (50) *ibid.*, p. 51.
- (51) *L'Être et le Néant*, pp. 720-721.

第五部 時代と思想

第一章 フランス現代文学に見る「不条理」の実体 ―カミュ、マルロー、サルトル―

- (1) Albert Camus, *le mythe de Sisyphe*, Gallimard, 1942, p. 13.
- (2) *ibid.*, p. 32.
- (3) テルトリアヌスについては、カミュの学位論文『キリスト教形而上学とネオプラトニズム』及び『反抗的人間』の中にも、関係記事が散見される。
- (4) S・フィンケルタイン、『実存主義とアメリカ文学』、永原誠訳、紀伊國屋書店、一九六八、p. 8.
- (5) コリン・ウィルソン、『新時代の文学』、中村保男訳、福村出版社、一九七六、p. 84.
- (6) *ibid.*, p. 84.
- (7) 因みに、サルトルも《実存主義哲学のいくつかの用語、例えば世界内存在 *In-der-Welt-sein* のような言葉はもうすでに腐敗しています。それらの言葉にはいまではいろんな夾雑物が入りすぎています。もちろん、ハイデッガーがあの言葉をはじめ語ったころには、それはハイデッガーが言おうとしたことだけしか意味しなかつた。ところがいまでは、それはなんでも意味してしまふ。「実存主義者」とか、「実存的」とかいう言葉と同様に、単なる一つの言葉にすぎません。私は先日タクシー事故に遭つたのですが、それについて、われわれが大阪の交通地獄の実存的経験をしたのであると言つた日本人がいました（……）哲学は……言葉を変えることによって……自己を再創造する……》と、一九六六年の日本の知識人との対話で語っているが、こうした経緯は作家一人の言葉との関係においても生じる現象ではなからうか。
- (8) André Malraux, *Les Conquérants* : 『征服者』、沢田潤訳、中央公論社、一九六四、p. 42.
- (9) *ibid.*, p. 42.
- (10) André Maurois, *De Proust à Camus* : 『現代フランス作家論』、谷長茂他訳、駿河台出版社、一九七〇、pp. 419-423.
- (11) 《Je reconnais donc ici une oeuvre absurde dans ses principes.》 *le mythe de Sisyphe*, p. 175.
- (12) R.-M. ALBERÈS, *BILAN LITTÉRAIRE DU XX^e SIÈCLE* : 『二十世紀文学の決算』、村松剛訳、紀伊國屋書店、一九六

ト' p. 61.

- (13) André Malraux, *La Condition humaine*, Gallimard, 1946, p. 74.
- (14) *ibid.*, p. 126.
- (15) R.-M. ALBÉRÈS, *l'Aventure intellectuelle du XX^e siècle*, ALBIN MICHEL, 1963, p. 252.
- (16) André Malraux, *La Voie royale* : 『王道』' 滝田文彦訳、新潮世界文学、一九七七、p. 29.
- (17) *ibid.*, p. 30.
- (18) Albert Camus, *L'Homme révolté*, Gallimard, 1945, p. 19.
- (19) 『王權』' p. 133.
- (20) *ibid.*, p. 133.
- (21) *La Condition humaine*, p. 246.
- (22) *le mythe de sisyphé*, p. 13.
- (23) *ibid.*, p. 26.
- (24) *ibid.*, p. 15.
- (25) *ibid.*, p. 18.
- (26) *ibid.*, p. 18.
- (27) *ibid.*, p. 19.
- (28) *ibid.*, p. 18.
- (29) *ibid.*, p. 18.
- (30) *ibid.*, p. 76.
- (31) *ibid.*, p. 78.
- (32) *ibid.*, p. 78.

- (33) *ibid.*, p. 19.
- (34) *ibid.*, p. 77.
- (35) *ibid.*, p. 76.
- (36) *ibid.*, p. 76.
- (37) *ibid.*, pp. 76-78.
- (38) *ibid.*, p. 78.
- (39) フォイエル・バッハ、「唯心論と唯物論」、船山信一訳、岩波文庫、一九八一、p. 19.
- (40) エマニユエル・ムーニエ、「カミュ―絶望者たちの希望」、佐藤昭夫訳、審美文庫、一九七三、p. 19.
- (41) Albert Camus, *L'Homme révolté*, Gallimard, 1954, p. 16.
- (42) Sartre, *L'Être et le Néant*, Gallimard, 1968, p. 559.
- (43) *ibid.*, p. 617.
- (44) *ibid.*, p. 623.
- (45) *ibid.*, p. 624.
- (46) *ibid.*, p. 624.
- (47) Sartre, *la Nausée*, Gallimard, folio, 1978, p. 181.
- (48) *ibid.*, p. 181.
- (49) *ibid.*, p. 181.
- (50) *ibid.*, p. 182.
- (51) *ibid.*, p. 182.
- (52) *ibid.*, p. 182.
- (53) *ibid.*, p. 182.

- (54) *ibid.*, p. 181.
- (55) *ibid.*, p. 184.
- (56) *ibid.*, p. 184.
- (57) *ibid.*, p. 185.
- (58) コリン・ウィルソン、『小説のために』、鈴木建三訳、紀伊國屋書店、一九八〇、p. 215.
- (59) コリン・ウィルソン、『至高体験』、由良君美他訳、河出書房、一九八一、p. 304.
- (60) *Le mythe de sisyphé*, p. 13.
- (61) Pierre de Boisdeffre, *Le Roman Français Depuis 1900, que sais-je?*, 1979, p. 47.
- (62) エドガー・モラン、『人間と死』、渡辺広士訳、審美文庫、一九七四、p. 46.

第二章 サルトルの実存的「不安」について

- (1) Blaise Pascal, *Pensées*, 「世界の名著、パスカル」前田陽一訳、中央公論社、『パンセ』、第二章断章七十二。
 - (2) 「私は不安に満ちている」ほうがよい。「私は不安に満ちた精神を持っている」。前掲書、第一章断章五十六。
 - (3) 前掲書、第二章断章六十三。
- モンテーニュに関しては例えは次のような記述がパスカルに不快感を与えたと推察される。「自殺」についての項で彼は「自殺によって避けても良い病気は三つしかない。そのうちで最も辛いのは膀胱結石である」と自殺の赦される条件を提示したあとで、良心に加えられる暴力について言及する。特に婦人の貞操に対する暴力と自殺について、数多の聖女に名を連ねる貴婦人たちが、敵方の兵士による暴行を避けるために自殺した例を、敬意を捧げながら挙げている。そして、現代(当時)のそうした不幸に巻き込まれた二婦人のケースを紹介する。《この女は数人の兵士の手に渡ってこう言った。「ああ、ありがたいことだ。せめて一生一度だけでも罪を犯さずに堪能できたのだもの》。モンテーニュはかくして、このような不幸な境遇に陥っても自殺することのないよう暗に仄めかしている。ミシェル・ド・モンテーニュ、『エッセー』、

原一郎訳、筑摩世界文学大系十三、一九八〇、pp.251-253.

- (4) 前掲書、第二章断章六十三。
- (5) 同書、断章七十七。
- (6) 同書、断章七十八。
- (7) ゼーレン・キルケゴール、『不安の概念』『世界の名著、キルケゴール』田淵義三郎訳、中央公論社、p.210.]
- (8) キルケゴール、『あれか、これか』、『キルケゴール著作集一』第一卷(上) 浅井真男訳、白水社、p.246.]
- (9) ヘーゲルのこと。
- (10) „*Sein und Zeit*“ von Martin Heidegger, erste Auflage, 1927. Max Niemeyer, Verlag. 『存在と時間』松尾啓吉訳、勁草書房、上巻、p.10.]
- (11) フランス語では un tel (某氏)、un tel から脱却し本来的な生き方を創造することが実存哲学のねらいである。
- (12) 先駆的覚悟性 (Vorlaufende Entschlossenheit)。
- (13) サルトル、『いま 希望とは』ル・ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール「朝日ジャーナル、海老坂武訳・解説、一九八〇、四、十八、p.13.]
- (14) Raymond Aron, *Mémoires*, 1983, Julliard, pp. 715-720.
旧友：mon petit camarade, マロンは学生時代からサルトルをそのように呼んでいた。
- (15) *ibid.*, p. 716.
- (16) Simone de Beauvoir, *La cérémonie des adieux suivi d'Entretien avec Jean-Paul Sartre*, 1974, Gallimard, p. 150.
- (17) *ibid.*, p. 151.
- (18) Alain Buisine, *L'aidéurs de Sartre*, 1986, Presses Universitaires de Lille, p. 61.
- (19) *Les carnets de la drôle de guerre*, Gallimard, 1983, p. 17.
- (20) *L'aidéurs de Sartre*, p. 63.

- (21) John Gerassi, *Sartre, Conscience hate de son siècle*, II. *Adulte Terrible*, Édition du Rocher, 1992.
 - (22) サルトル追悼 A・グリュックスマンに聞く、『海』、西永良成訳、中央公論社、一九八〇、七月号、p.328.
 - (23) 『海』、p.346.
 - (24) 『スキ 希望とは』朝日ジャーナル、p.13.
 - (25) *L'Être et le Néant*, 1986, Gallimard, p. 39.
 - (26) *ibid.*, première partie, le problème du néant, p. 39.
 - (27) *ibid.*, p. 62.
 - (28) *ibid.*, p. 66.
 - (29) 『サルトルー自身を語る』、海老坂武訳、人文書院、一九七九、p.39.
 - (30) Anna Boschetti, *Sartre et «Les Temps Modernes»*, minut, 1985 『知識人の覇権』、石崎晴己訳、一九八七、新評論、p. 372]
 - (31) *La Nausée*, 1968, Gallimard, Le Livre de poche, p. 16.
 - (32) *Mémoires*, p. 718.
 - (33) 『知識人の覇権』、p. 149.
- 第三章 『汚れた手』と『奇妙な戦争のメモ』のはざま**
- (1) 例えば王位にのぼった伯父クレオンの命に背き、兄ポリニスを埋葬するアンチゴネには政治的立場を配慮する気持ちとそれを凌駕する倫理観の、二者択一を迫られる葛藤があったであろう。
 - (2) Jean-Paul Sartre, *Situations*, VII, Gallimard, 1965, p. 307.
 - (3) *ibid.*, p. 233.
 - (4) *ibid.*, p. 250.

- (5) *ibid.*, p. 250.
- (6) Jacques Derrida, *pourquoi pas Sartre*, 『現代思想七』一九八七、p. 80.
- (7) Tzvetan Todorov, *L'homme dépassé*, Seuil, 1996, p. 29.
- (8) *ibid.*, p. 30.
- (9) *ibid.*, p. 30.
- (10) *ibid.*, p. 30.
- (11) *ibid.*, p. 31.
- (12) *ibid.*, p. 33.
- (13) *ibid.*, p. 34.
- (14) *ibid.*, p. 33.
- (15) *ibid.*, p. 33.
- (16) *ibid.*, p. 140.
- (17) John Gerassi, *Sartre, Conscience haïe de son siècle*, Edition du Rocher, 1992, p. 49.
- (18) Geneviève Idt, *Sartre romancier : lectures actuelles de l'œuvre romanesque de Sartre*, 平成十二年(二〇〇〇年)十一月二十
八日、関西大学に於ける Geneviève Idt 氏 招聘講演原稿より。
- (19) J.-P. Sartre, *Carnets de la drôle de guerre*, Gallimard, 1995, p. 188.
- (20) J.-P. Sartre, *La mort dans l'âme*, Gallimard, 1949, p. 110.
- (21) *ibid.*, p. 110.
- (22) *Carnets de la drôle de guerre*, p. 188.
- (23) *ibid.*, p. 189.
- (24) *ibid.*, p. 192.

- (25) *ibid.*, p. 196.
- (26) *ibid.*, p. 214.
- (27) *ibid.*, p. 241.
- (28) *L'homme dépassé*, p. 136.
- (29) *ibid.*, p. 136.
- (30) *ibid.*, p. 140.
- (31) *ibid.*, p. 141.
- (32) *ibid.*, p. 140.
- (33) *ibid.*, p. 141.
- (34) *ibid.*, p. 142.
- (35) *ibid.*, p. 142.
- (36) *ibid.*, p. 144.
- (37) *ibid.*, p. 144.
- (38) J.-P. Sartre, *Les Mots*, Gallimard, 1960, p. 24.
- (39) J.-P. Sartre, *Les Mains Sales*, Le livre de poche, 1967, p. 201.
- (40) *ibid.*, p. 202.
- (41) Voltaire, *L'Affaire Calas et autres affaires*, Gallimard, folio, 1998, p. 191.
- (42) Anna Boschetti, 『知識人の覇権』石崎晴巳訳、新評論、一九八七年。
- (43) Hannah Arendt, 『全体主義の起源』三、大久保和郎・大島かおり訳、みすず書房、二〇〇三、p. 232.
- (44) *L'homme dépassé*, p. 140.

テキストと引用・参考文献

1 サルトルの著作

Romans et Nouvelles

La Nausée, Gallimard, Le livre de poche, 1956.

Le Mur, Gallimard, L.P., 1953.

Les Chemins de la Liberté, roman.

I, *L'Age de Raison*, L.P., 1960.

II, *Le Sursis*, Gallimard, P.L., 1961.

III, *La Mort dans l'Ame*, Gallimard, P.L., 1949.

OEuvres Romanesques, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1981.

Théâtre

Théâtre, T.I.(*Les Moushes, Huis-Clos, Morts sans sépulture, La Putain Respectueuse*),
Gallimard, 1947.

Les Mains Sales, Gallimard, L.P., 1953.

Le Diable et le Bon Dieu, Gallimard, L.P., 1958.

Huis-Clos, suivi de *Les Moushes*, Gallimard, L.P., 1964.

Cinéma

Sartre, script intégral du film produit par Alexandre Astruc et Michel Contat, avec
Simone de Beauvoir, Jacques-Laurent Bost, André Gortz et Jean Pouillon,
Gallimard, 1981.

Littérature

Beaudelaire, Gallimard, Idées, 1963.

Qu'est-ce que la littérature ?, Gallimard, (dans *Situations II*), 1948.

Les Mots, Gallimard, 1969.

Un théâtre de situations, présentés et annotés par Michel Contat et Michel Rybalka,
Gallimard, 1973.

テキストと引用・参考文献

L'Idiot de la famille, Gustave Flaubert de 1821 à 1857; Tom.I, Tom.II, Gallimard, 1971.

Philosophie et Essais

La Transcendance de l'Ego: esquisse d'une description phénoménologique, Vrin, 1965.

L'Imagination, Presses Universitaires de France, 1936.

Esquisse d'une théorie des émotions, Hermann, 1960.

L'Imaginaire: psychologie phénoménologique de l'imagination, Gallimard, 1948.

L'Etre et le Néant, Gallimard; *Essai d'ontologie phénoménologique*, Gallimard, 1968.

L'Existentialisme est un humanisme, Nagel, 1946.

Critique de la Raison Dialectique: précédé de Questions de Méthode, Gallimard, 1960.

Situations

Situations I., Gallimard, 1947.

Situations II., Gallimard, 1948.

Situations III., Gallimard, 1949.

Situations IV., Gallimard, 1964.

Situations V., Gallimard, 1964.

Situations VI., Gallimard, 1964.

Situations VII., Gallimard, 1965.

Carnet et Lettre

Les Carnets de la drôle de guerre: novembre 1939-mars 1940, Gallimard, 1983.

Lettres au Castor et à quelques autres, 2 vol., Gallimard, 1983.

2 欧文による文献

Albères, R.-M., *Jean-Paul Sartre*, Éditions Universitaires, 1953.

Albères, R.-M., *Bilan littéraire du XX^e siècle*, Aubier, 1956.

Albères, R.-M., *L'aventure intellectuelle du XX^e siècle: panorama des littératures européennes 1900-1959*, Albin Michel, 1959.

- Aron, Raymon, *Mémoires*, Paris, Julliard, 1983.
- Aron, Raymon, *L'opium des intellectuels*, Calman-lévy, 1983.
- Audry, Colette, *Sartre*, Éditions Seghers, 1966.
- Barnes, Hazel E., *Sartre & Flaubert*, The University of Chicago Press, 1981.
- Beauvoir, Simone de, *Pour une morale de l'ambiguïté*, Gallimard, 1947.
- Beauvoir, Simone de, *L'existentialisme et la sagesse des nations*, Nagel, 1948.
- Beauvoir, Simone de, *Le deuxième sexe* ; v. 1., v. 2., Gallimard, 1949.
- Beauvoir, Simone de, *Mémoires d'une jeune fille rangée*, Gallimard, coll.folio.
- Beauvoir, Simone de, *La Force de l'âge*, Gallimard, 1960. (coll.folio.)
- Beauvoir, Simone de, *La Force des choses*, Gallimard, 1963. (coll.folio.)
- Beauvoir, Simone de, *La Cérémonie des adieux*, Gallimard, 1981.
- Beauvoir, Simone de, *Journal de guerre: septembre 1939- janvier 1941*, édition présentée, établie et annotée par Sylvie le Bon de Beauvoir, Gallimard, 1990.
- Beauvoir, Simone de, *Lettres à Nelson Algren*, Gallimard 1997.
- Bertholet, Denis, *Sartre*, Plon, 2000.
- Boisdeffre, Pierre de, *Métamorphose de la littérature; 2, de Proust à Sartre*, Édition Alsatia, 1952.
- Boideffre, Pierre de, *Le roman français, depuis 1900*, Presses Universitaires de France, 1979. (Que sais-je?)
- Bonnefoy, Claude, *Panorama critique de la Littérature moderne*, Pierre Belfon, 1980.
- Boutang, Pierre, *Sartre est-il un possédé?*, Table Ronde, 1950.
- Brochier, Jean-Jacques, *Pour Sartre: le jour où Sartre refusa le Nobel*, Jean-Claude Lattès, 1995.
- Broyelle, Claudie et Jacques, *Les illusions retrouvées*, Bernard Grasset, 1982.
- Buisine, Alain, *Laideurs de Sartre*, Presses universitaires de Lille, 1986.
- Burgelin, Claude, *Lectures de Sartre*, Presses Universitaires de Lyon, 1986.
- Camus, Albert, *Le Mythe de Sisyphe*, Gallimard, 1942.
- Camus, Albert, *L'Homme révolté*, Gallimard, 1951.
- Celeux, Anne-Marie, *Jean-Paul Sartre, Simone de Beauvoir: Une Expérience commune, deux Ecritures*, Nizet, 1986.
- Charmé, Stuart Zane, *Vulgarity and authenticity: dimensions of otherness in the world*

- of Jean-Paul Sartre, University of Massachusetts Press, 1991.
- Cohen-Solal, Annie, *Sartre 1905-1980*, Gallimard, 1985.
- Collins, Douglas, *Sartre as biographer*, Harvard University Press, 1980.
- Contat, Michel & Rybalka, Michel, *Les écrits de Sartre: chronologie, bibliographie commentée*, Gallimard, 1970.
- Contat, Michel, *Pourquoi et comment Sartre a écrit «Les Mots»*, Presses Universitaires de France, 1996.
- D'Ormesson, Jean, *Une autre histoire de la littérature française II*, NiL éditions, 1998.
- Doubrovsky, Serge, *Doubrovsky, Autobiographiques : de Corneille à Sartre*, Presses Universitaires de France, 1988.
- Fitch, Briant T., *Le sentiment d'étrangeté chez Malraux, Sartre, Camus et S. de Beauvoir*, Bibliothèque des Lettres modernes, 1964.
- Flaubert, Gustave, *Correspondance 2*, Gallimard, 1980. (Bibliothèque de la Pléiade)
- Gagnebin, Laurent, *Connaitre Sartre*, Marabout, 1977.
- Gerassi, John, *Conscience haïe de son siècle*, Édition du Rocher, 1992.
- Gide, André, *Journal, 1889-1939*, Gallimard, 1977. (Bibliothèque de la Pléiade)
- Goethe, Johann Wolfgang, *Götz von Berlichingen*, Deutscher Taschenbuch Verlag, 1979.
- Hayim, Gila J., *The Existential Sociology of Jean-Paul Sartre*, 1980.
- Hodard, Philippe, *Sartre: entre Marx et Freud*, Delarge, 1979.
- Idt, Geneviève, «Modèles scolaires dans l'écriture sartrienne», *revue des sciences humaines*, No.174, 1979.
- Issacharoff, Michaël & Vilquin, Jean-Claude, *Sartre et la mise en signe*, Klincksieck, 1982.
- Jeanson, Francis, *Sartre par lui-meme*, Éditions du Seuil, 1955.
- Jeanson, Francis, *Le problème moral et la pensée de Sartre*, Seuil, 1965.
- Joubert, Ingrid, *Aliénation et liberté dans les Chemins de la liberté de Jean-Paul Sartre*, Didier, 1973.
- Kern, Edith, *Sartre*, Prentice-Hall, Inc., 1962.
- LaCapla, Dominick, *A Preface to Sartre*, Methuen & Co. Ltd., 1978.
- Lecarme, Jacques, *Les critiques de notre temps et Sartre*, Édition Garnier, 1973.

- Lévy, Bernard-Henri, *Le Siècle de Sartre*, Grasset, 2000.
- Lilar, Suzanne, *A propos de Sartre et de l'amour*, Gallimard, 1967.
- Lorris, Robert, *Sartre dramaturge*, A. G. Nizet, 1975.
- Magny, Claude-Edmonde, *Essai sur les limites de la Littérature*, Petite Bibliothèque Payot, 1967.
- Maurois, André de l'académie française, *De Gide à Sartre*, Librairie Académique Perrin, 1995.
- McCall, Dorothy, *The Theater of Jean-Paul Sartre*, Columbia University Press, 1969.
- Merleau-Ponty, Maurice, *Humanisme et Terreur*, Gallimard, 1947.
- Moeller, Charles, *Littérature de XX^e siècle et Christianisme II, La Foi en Jésus-Christ*, Casterman, 1967.
- Monteuil, Claudine, *Les Amants de la liberté*, Édition no 1-Paris, 2000.
- Mounier, Emmanuel, *Malraux Camus Sartre Bernanos L'espoir des désespérés*, Seuil, 1953.
- Perrin, Marius, *Avec Sartre au stalag 12 D*, Jean-Pierre Delarge, 1980.
- Rousseau, André, *Littérature du vingtième siècle V*, Albin Michel, 1962.
- Rousset, Jean, *Forme et signification : essais sur les structures littéraires de Corneille à Claudel*, Corti, 1964.
- Sagan, Françoise, *Avec mon meilleur souvenir*, Gallimard, 1984.
- Santoni, Ronald E., *Bad Faith, Good Faith, and Authenticity in Sartre's early Philosophy*, Temple University Press (Philadelphia), 1995.
- Sapiro, Gisèle, *La guerre des écrivains 1940-1953*, Fayard, 1999.
- Scriven, Michael, *Sartre's existential biographies*, The Macmillan Press Ltd., 1984.
- Sicard, Michel, *Essais sur Sartre, Entretiens avec Sartre (1975-1979)*, Editions Galilée, 1989.
- Sicard, Michel, *OBLIQUUS*, No.18-19, Borderie.
- Sicard, Michel, *OBLIQUUS*, Numéro special, Sartre Inédit, , *La Grande Moral exraits d'un Cahier de notes (1947)*.
- Silverman, Hugh J., *De Péguy à Sartre, Paradoxes du XX^e siècle*, Editions H. Messtiller Neuchatel, 1964.
- Simon, Pierre-Henri, *L'homme en procès*, Petite Bibliothèque Payot, 1965.

- Simon, Pierre-Henri, *Théâtre & destin: la signification de la renaissance dramatique en France au XX^e siècle*, Armand Colin, 1966.
- Simon, Pierre-Henri, *L'esprit et l'histoire: essai sur la conscience historique dans la littérature du XX^e siècle*, Petite Bibliothèque Payot, 1969.
- Stern, Alfred, *Sartre: his philosophy and existential psychoanalysis*, The Liberal Arts Press, 1953.
- Tagliabue, Guido Morpurgo, *Sartre: a collection of critical essays*, edited by Edith Kern, Prentice-Hall, 1962.
- Thody, Philip, *Jean-Paul Sartre*, Macmillan, 1992.
- Todorov, Tzvetan, *L'homme dépaysé*, Éditions du Seuil, 1996.
- Varrin, René, *L'érotisme dans la littérature française*, Éditions de la Pensée moderne, 1969.
- Verstraeten, Pierre, *Autour de Jean-Paul Sartre*, Gallimard, 1981.
- Voltaire, *L'Affaire Calas et autres affaires* ; édition présentée, établie et annotée par Jacques Van den Heuvel, Gallimard, 1998. (Collection Folio)
- Waelhens, Alphonse de, *Phénoménologie et Vérité*, Editions Nauwelaerts, 1969.
- Warnock, Mary, *The Philosophy of Sartre*, Hutchinson University Library (London), 1965.
- Werner, Eric, *De la violence au totalitarisme*, Calmann-lévy, 1972.
- Zima, Pierre V., *L'indifférence romanesque : Sartre, Moravia, Camus*, Sycamore, 1982.
- L'Arc 30, Sartre aujourd'hui*, Chemin de repentance, Aix-en-Provence, 1966.
- Figures de Sartre*, magazine littéraire No. 176, 1981.
- Sartre Image d'une vie*, Gallimard, 1978.
- Jean-Paul Sartre, *Obliques Numéro spécial*, Éditions Borderie, 1979.
- L'ARC, De Roquentin à Mathieu*, Annie Leclerc

3 邦文による文献

- アストリュック、アレクサンドル&コンタ、ミシェル監督、海老坂武訳、『サルトルー自身を語る』、人文書院、1977年。
- 荒松雄他編集、『近代世界の形成』（岩波講座世界歴史；14. 近代；1）、岩波書店、1969年。
- アーレント、ハナ、大久保和郎・大島かおり訳、「全体主義」（『全体主義の起源』；3）、みすず書房、1974年、（原題：*The origins of totalitarianism*, World Pub. Co., 1958.）。
- アルベレス、R.-M.、松浪信三郎訳、『サルトル：人と作品』、河出書房、1956年（河出新書）。
- アルベレス、R.-M.、新庄嘉章他訳、『現代小説の歴史』、新潮社、1965年。
- アロン、レーモン、三保元訳、『レーモン・アロン回想録』；1・2、みすず書房、1999年。
- ウナムーノ、ミゲル・デ、神吉敬三・佐々木孝訳、『キリスト教の苦悶』（叢書・ユニベルシタス）、法政大学出版局、1970年。
- ウィルソン、コリン、福田恆存・中村保男訳、『アウトサイダー』、紀伊國屋書店、1975年。
- ウィルソン、コリン、中村保男訳、『新時代の文学』、福村出版、1976年。
- ウィルソン、コリン、鈴木建三訳、『小説のために：想像力の秘密』、紀伊國屋書店、1977年。
- ウィルソン、コリン、由良君美・四方田犬彦訳、『至高体験』、河出書房、1981年。
- ヴェーバー、マックス、大塚久雄訳、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、岩波書店、1989年。
- ヴェルコール、河野与一・加藤周一訳、『海の沈黙・星への歩み』、岩波書店、1951年（原題：*Le silence de la mer et autres récits*, Albin Michel, 1951.）。
- ヴェルコール、森乾訳、『沈黙のたたかい：レジスタンスの記録』、藤森書店、1978年（原題：*La bataille du silence : souvenirs de minuit*, Presses de la cité, 1967.）。
- エルトン、G. R.、越智武臣訳、『宗教改革の時代：1517-1559』、みすず書房、1973年（原題：*Réformation Europe, 1517- 1559*, Collins, 1963.）。

テキストと引用・参考文献

- エンゲルス、フリードリヒ、秦玄龍訳、『ドイツ農民戦争』（マルクス・エンゲルス農業問題集；1）、文化評論社、1948年。
- オルソン、ロバートG.、成川武夫訳、『実存主義入門』、紀伊國屋書店、1966年。
- カミュ、アルベール、矢内原伊作訳、『シジフォスの神話』、新潮社、1954年（新潮文庫）。
- カミュ、アルベール、佐藤朔・白井浩司訳、『反抗の人間』（カミュ著作集；4）、新潮社、1958年。
- キルケゴール、セーレン、浅井真男訳、『あれか、これか』第1部上（『キルケゴール著作集』；1）、白水社、1963年。
- キルケゴール、セーレン、榊田啓三郎責任編集、『不安の概念』（『世界の名著キルケゴール』）、中央公論社、1979年。
- ギロー、ピエール、佐藤信夫訳、『文体論：ことばのスタイル』、白水社、1979年（文庫クセジュ）（原題：La stylistique, Presses Universitaires de France, 1963. (Que sais-je? No.646)）。
- ゲーテ、奥津彦重訳、『箴言と省察』、宝文館、1947年。
- ゲーテ、菊盛英夫・大野俊一訳、『詩と真実、イタリアの旅』（ゲーテ全集；第10巻）、人文書院、1960年。
- ゲーテ、新開良三訳、『ゲーテ全集 第十一巻』、改造社、1936年。
- 木村謹治、『「若きゲーテ」研究』、弘文堂書房、1938年。
- 克蘭ストン、モーリス、堂庭一郎訳、『サルトルの世界：絶望の裏側のいのち』、清水弘文堂書房、1971年。
- グリュックスマン、アンドレ、西永良成訳、『歴史への責任』、『海』、中央公論社、1980年7月号。
- クンデラ、ミラン、金井裕・浅野敏夫訳、『小説の精神』、法政大学出版局、1990年（叢書・ユニベルシタス）（原題：L'art du roman, Gallimard, 1986.）。
- コルフ、ヘルマン・アウグスト、永松譲一訳、『ゲーテ時代の精神』第1巻、桜井書店、1944年。
- サルトル、J.-P.、西永良成訳、『フロイト＜シナリオ＞』、人文書院、1987年。
- サルトル、J.-P.、メルロ＝ポンティ、モーリス、菅野楯樹訳、『サルトル／メルロ＝ポンティ往復書簡：決裂の証言』、みすず書房、2000年。

サルトル、『いま、希望とは』、ル・ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール、朝日
ジャーナル、海老坂武訳・解説、1980年。

ジッド、アンドレ、鈴木健郎・伊吹武彦訳、『贖金づくり』、三笠書房、1954年。

ジュネ、ジャン、堀口大学訳、『花のノートルダム』、新潮社、1969年（新潮文
庫）。

ジュネット、ジェラルール、平岡篤頼・松崎芳隆訳、『フィギュール』、未来社、
1993年。

ジュネット、ジェラルール、和泉涼一訳、『スイユ、テキストから書物へ』、水声
社、2001年。

シオンデイ、ペーター、市村仁・丸山匠訳、『現代戯曲の理論』、法政大学出版
局、1979年（叢書・ウニベルシタス）。

白井浩司、『純粹観客：現代フランス文学拾遺』、大光社、1970年。

セリーヌ、L.-E、石崎晴己訳、『戦争、教会：他』、国書刊行会、1984年（*L'église:
comédie en cinq actes*, Denoël et Steele, 1933.）。

曾野綾子、『愛と許しを知る人びと』、新潮社、1985年（新潮文庫）。

ソフォクレス、呉茂一訳、『アンティゴネー』、岩波書店、1981年（岩波文庫）。

ソフォクレス、藤沢令夫訳、『オイディプス王』、岩波書店、1981年（岩波文
庫）。

弟子丸泰仙、『禅僧ひとりヨーロッパを行く』、春秋社、1971年。

弟子丸泰仙、『パリの禅僧』、実業之日本社、1975年。

デリダ、ジャック、「自伝的な“言葉”、*pourquoi pas Sartre*」、『現代思想』、
1987年。

トロワフォンテーヌ、ロジェ、安井源次訳、『サルトルとマルセル』、弘文堂、
1950年。

ナドー、モーリス、篠田浩一郎訳、『戦後のフランス小説』、みすず書房、1966
年（原題：*Le roman Français depuis la guerre*, Gallimard, 1963.）。

ハイデッガー、マルティン、松尾啓吉訳、『存在と時間』上・下、勁草書房、
1969年。

バスカル、前田陽一訳、『パンセ』、中央公論社、1973年。

バルト、カール、久米博訳、『教会の信仰告白』、新教出版社、2003年。

半田元夫、『宗教改革小史』、清水弘文堂書房、1967年。

テキストと引用・参考文献

- バルト、ロラン、渡辺淳・沢村昂一訳、『零度のエクリチュール』、みすず書房、1971年（原題： *Le degré zéro de l'écriture*, Éditions du Seuil, 1953.）。
- フィンケルスタイン、シドニー、永原誠訳、『実存主義とアメリカ文学』、紀伊國屋書店、1968年。
- フォイエエルバッハ、ルートヴィヒ・アンドレアス、船山信一訳、『唯心論と唯物論』、岩波書店、1981年（岩波文庫）。
- 舟木重信、『ゲーテ人生読本』第4巻、六芸社、1936年。
- ブランショ、モーリス、重信常喜訳、『焰の文学』、紀伊國屋書店、1958年（原題： *Maurice Blanchot, La part du feu*, Gallimard, 1949.）。
- プラトン、久保勉訳、『饗宴』、岩波書店、1952年（岩波文庫）。
- フリーデントール、リヒャルト、平野雅史他訳『ゲーテ：その生涯と時代』上・下、講談社、1979年。
- ブレイG.&ギトンM.、佐藤朔・若林真訳、『小説の時代』、紀伊國屋書店、1959年。
- ベイントン、R. H.、出村彰訳、『宗教改革史』、新教出版社、1966年。
- バルクソン、アンリ、合田正人・平井靖史訳、『意識に直接与えられたものについての試論』、筑摩書房、2002年（原題： *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Alcan, 1911.）。
- ベンジング、マンフレート、田中真造訳、『トーマス・ミュンツァー：ドイツ農民戦争と革命の神学』、未来社、1970年。
- ヘーゲル、上妻精他訳、『法の哲学』、岩波書店、2000年。
- ヘーゲル、武市健人訳、『哲学史』、岩波書店、1996-2001年。
- ベンジングM. & ホイヤーS.、『ドイツ農民戦争 1524-1526』、未来社、1980年。
- ベンヤミン、ヴァルター、高木久雄編集解説、『文学の危機』（ヴァルター・ベンヤミン著作集；7）、晶文社、1969年。
- ホーソン、ナサニエル、西前孝訳、『ブライズデイル・ロマンス』、八潮出版社、1984年。
- ボーヴォワール、シモーヌ・ド、青柳瑞穂他訳、『両義性のモラル』（ボーヴォワール著作集；2）、人文書院、1968年。
- ボーヴォワール、シモーヌ・ド、大久保和郎訳、『実存主義と常識』、創元社、

- 1952年。
- ボーヴォワール、シモース・ド、生島遼一訳、『第二の性』、新潮社、1987年。
- ボーヴォワール、シモース・ド、朝吹登水子・二宮フサ訳、『女ごかり：ある女の回想』上・下、紀伊國屋書店、1963年。
- ボーヴォワール、シモース・ド、朝吹三吉他訳、『別れの儀式』、人文書院、1983年。
- ボーヴォワール、シモース・ド、西陽子訳、『ボーヴォワール戦中日記』、人文書院、1993年。
- ボスケッティ、アンナ、石崎晴己訳、『知識人の覇権：20世紀フランス文化界とサルトル』、新評論、1987年（原題：*Sartre et “Les Temps modernes”：une entreprise intellectuelle*, Éditions de Minuit, 1985.）。
- ボワデッフル、ピエール・ド、平岡篤頼・安斎千秋訳、『今日のフランス作家たち』（文庫クセジュ）、白水社、1964年（原題：*Le roman francais depuis 1900*, Presses Universitaires de France, 1979.（Que sais-je?））。
- ボワデッフル、ピエール・ド、望月芳郎訳、『小説はどこへ行くか』、講談社、1969年（原題：*Où va le roman?*, Del Duca, 1962.）。
- マキャベリ、ニコロ、会田雄次責任編集、『君主論』（『世界の名著 マキャベリ』）、中央公論社、1979年。
- マドセン、アクセル、藤枝滯子訳、『カップル』、新潮社、1981年（原題：*Hearts and minds : the common journey of Simone de Beauvoir and Jean-Paul Sartre*, Morrow, 1977）。
- マニー、クロード・エドモンド、三輪秀彦訳、『文学の限界：カフカ サルトル Ch. モーガン』、竹内書店、1968年。
- マルロー、アンドレ、堀田郷弘訳、『風狂王国：幻想短篇集』、福武書店、1991年（福武文庫）。
- マルロー、アンドレ、小松清訳、『征服者』、新潮社、1969年（新潮文庫）（原題：*Les conquerants*, Albert Skira, 1928.）。
- マルロー、アンドレ、滝田文彦訳、『王道』、新潮社、1970年（新潮文庫）（原題：*La voie royale*, Albert Skira, 1930.）。
- マルロー、アンドレ、小松清・新庄嘉章訳、『人間の条件』、新潮社、1971年、（新潮文庫）（原題：*Condition humaine*, Gallimard, 1949.）。

テキストと引用・参考文献

- ムーニエ、エマニュエル、竹下春日訳、『実存主義案内』、理想社、1971年。
- ムーニエ、エマニュエル、佐藤昭夫訳、『カミュ：絶望者たちの希望』、審美社、1972年（審美文庫）。
- メルロ＝ポンティ、モーリス、滝浦静雄他訳、『弁証法の冒険』、みすず書房、1972年（原題：*Les aventures de la dialectique*, Gallimard, 1955.）。
- モア、トマス、平井正穂訳、『ユートピア』、岩波書店、1957年（岩波文庫）。
- モラン、エドガー、渡辺広土訳、『人間と死』、審美社、1974年（審美文庫）（原題：*L'homme et la mort dans l'histoire*, Correa, 1951.）。
- モーロワ、アンドレ、谷長茂他訳、『現代フランス作家論：プルーストからカミュまで』、駿河台出版、1970年（原題：*De Proust à Camus*, Academique Perrin, 1963.）。
- リカルドゥー、ジャン、野村英夫訳、『小説のテキスト：ヌーヴォー・ロマンの理論のために』、紀伊國屋書店、1974年（原題：*Pour une théorie du nouveau Roman*, Éditions du Seuil, 1971.）。
- 新改訳聖書刊行会訳、『聖書』、日本聖書刊行会、1973年。

著者紹介

川 神 傅 弘 (かわかみ・もりひろ)

1945年 鳥根県浜田市に生まれる
1970年 関西大学大学院文学研究科修士課程修了
現 在 関西大学文学部教授
専 攻 フランス文学
訳 書 『いま、サルトル——サルトル再入門「サルトル的エク
リチュールに見られる学校的文章モデル』(思潮社)、
1991年

サルトルの文学

倫理と芸術のはざまを奏でる受難曲

平成18年3月31日 発行

著 者 川 神 傅 弘

発行所 関 西 大 学 出 版 部
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35
TEL 06-6368-1121 / FAX 06-6389-5162

印刷所 株式会社 遊 文 舎
〒532-0012 大阪市淀川区木川東4-17-31

©2006 Morihiko KAWAKAMI

Printed in Japan

ISBN 4-87354-429-7 C3098

落丁・乱丁はお取替えいたします